

知的障害特別支援学校高等部における 自己理解および進路選択への意欲の向上を意図した進路学習の展開

北岡 大輔¹⁾ 滝元 あゆみ²⁾ 中筋 千晶²⁾

1)和歌山大学教育学部 2)和歌山大学教育学部附属特別支援学校

1 問題と目的

知的障害特別支援学校の生徒は、ほとんどが卒業後就労（福祉的就労を含む）する。そして現在、一般企業への就労率は徐々に高まってきている。しかし、その進路決定の過程においては、生徒自身の希望を表現したり、決定したりすることが難しい場合がある（清永・是永，2016）。この背景には、保護者が子どもの将来を心配するあまり本人と保護者の希望に乖離があることや本人の気持ちを尊重することが難しいことから本人の意思を確認せずに話を進めようとしてしまうこと、子どもの主体性が未熟であること等が考えられる。また、生徒自身が適切に自己理解することが難しいことにより、自らの適性に応じた職場選択が難しい場合が少なくない。そこで本研究では、生徒の自己理解を促し、主体的な進路選択の意欲の向上を意図した進路学習の指導と評価について、A 特別支援学校の実践を通して検討することを目的とする。

2 A 特別支援学校における進路指導の実際

A 特別支援学校高等部は、中度から軽度の知的障害がある生徒が多く在籍しており、進路は就労を希望する場合が多い。進路決定までの大まかな流れとしては、全学年が前期（6月）5日間、後期（11月）10日間の現場実習を経験し、2年生3学期には本人、保護者、担任、進路担当が会して進路に関する懇談を行い、進路の方向性を考え始める。3年生の前期から希望する事業所で現場実習を行い、本人、事業所の双方が了承することで進路決定となるため、3年生の現場実習については、前期、後期の現場実習には限定されず、繰り返し実習を行う場合がある。

3 方法

①プロフィールの作成

現場実習先と共有する生徒プロフィール（図1）を生徒と教員がともに作成する。そして、生徒自身が前回の実習評価等を教員とともにふり返り、プロフィールを見直し、次の実習に向け目標等を設定することで、適切な自己理解を促す。

②実習評価シートの活用

4者（保護者、本人、実習先、教員）の実習評価シート（図2～4）を用いてふり返り、それぞれの評価を重ね合わせることで、客観的な視点でのから自己理解を促す。

③実習後のふり返り

実習後の懇談と記録（図5）を使った保護者との確認を行うことで、本人の希望や気持ちを引き出す。

【学校での様子】
 ・休憩時間に友達と冗談を言い合って会話を楽しんでいる。
 ・教科学習に真剣に取り組み、授業の内容を理解し、楽しんで授業に参加している。
 ・あいさつを自分からすることや、時間を見て行動することに苦手意識があるが、改善しようと努力している。

【得意なこと】
 ・手先を使うような細かな作業や、絵を描くこと。

【苦手なこと】
 ・初対面の人に話しかけること。ただ、きっかけがあれば、会話を続けることができる。

【配慮・支援が必要なこと】
 ・同時に複数の指示を受けると整理できなかつたり忘れてしまったりするが、一つずつ、短い指示があればスムーズに取り組める。
 ・複数の指示があるときなどは必要に応じてメモを取る時間を設ける。
 ・声が小さくて聞き取りにくい時は、指摘すると改善することが出来る。

友達や先生との関わり
 係活動

手伝ってほしいこと
 ・支援してほしいこと
 例) 教えてもらう時、
 伝えてもらう時に、どんな
 ふうに教えてもらいたいか

図 1 プロフィール (生徒 D)

実習期間をふり返り、次の項目について○(できた)△(もう少し努力が必要)×(かなり努力が必要)で評価をお願いします。具体的に気付かれた点がありましたら、簡単に備考欄にご記入下さい。
 また、実習期間ががんばったと感じたこと、今後ががんばってほしいこと等を下の欄にご記入下さい。
 保護者や事業所の評価を受け、本人の今後の成長に活用したいと思えます。

項目	評価
1. 生活リズム	自分で起床することができた
2. 身だしなみ	自分で身だしなみを整えて出勤できた
3. 健康(食事)	自ら規則正しく食事ができた
4. 時間	自分で判断し、家を出ることができた
5. 通勤	決めた方法で通勤できた

図 2 実習評価シート (保護者)

つぎ こうもく すこ どりよく ひつよう
 次の項目について、○(できた)△(もう少し努力が必要)
 どりよく ひつよう じぶん ひょうか
 ×(かなり努力が必要)で自分で評価をしましょう。

こうもく 項目	評価
あいさつへんじ 1. 挨拶・返事	あいて き あいさつ へんじ 相手に聞こえるように挨拶や返事ができた
ことば 2. 言葉づかい	ことば ていねいな言葉づかいができた
ふくそうみ 3. 服装・身だしなみ	ふさわしい服装で、身だしなみを整えた
しじりかい 4. 指示・理解	せつめい ただ さぎょう 説明をきいて、正しく作業できた
しつもん 5. 質問	わからない時には質問できた

図 3 実習評価シート (本人・実習先)

項目	評価
1. 挨拶・返事・言葉遣いが適切にできている	○ △ ×
2. 指示を理解して作業をしている	○ △ ×
3. 集中して作業をしている	○ △ ×
4. 作業中の姿勢や態度は適切である	○ △ ×
5. 質問・報告・連絡ができている	○ △ ×

図 4 実習評価シート (教員)

日付	話した内容	今後について
	<ul style="list-style-type: none"> ・仕事内容について ・環境について ・周囲の人について ・仕事や結果への自信について ・保護者と話したこと 	

図 5 実習後の懇談の記録

4 結果

①プロフィールの作成について

- ・ 3年生の後期のプロフィール作成では、前期現場実習の事業所からの評価を見直し、担任と話をする中で、課題として指摘されたことを苦手なこととして記入することができた。例えば、「挨拶ができていない」と評価を受けた生徒については、「初めての人に話しかけることが苦手」と記入する等、客観的な評価を自分なりに受け止めている。また、その苦手な部分を克服しようとする意志が見られた。

②実習評価シートの活用について

・ 高等部3年生 A

前期現場実習で、事業所から「挨拶・返事」「報告・連絡・相談」の項目でできていないと評価を受け、後期現場実習では、「相手に聞こえるはっきりした声で挨拶をする」と目標を立て、取り組んでいた。「声の大きさ」等すぐには解決されない課題もあるが、事業所から前期に比べ挨拶ができていたと評価を得た。

・ 高等部3年生 B

前期現場実習で、事業所からは全ての項目で「できている」との評価を受けていたが、自分では、「挨拶・返事」「指示・理解」「報告・連絡・相談」の項目で、「大きな声でハキハキ話せていない」等の課題を意識していた。その後の夏休み中の実習、後期現場実習と経験を積む内、事業所の評価を客観的に受け止め、自分の強みは、「相手のことを考え、聞き取りやすい大きな声で話せること」であることに気づき、自信につながっていることがわかった。

③実習後のふり返りにについて

・ 高等部3年生 C

前期現場実習後、本人、担任、進路担当の3者でふり返りを行った際、事業所からの評価を受け、本人はまだ社会で働く土台が整えられていないことに意識が向き始めた。その後も本人は「働きたい」という気持ちが揺れることもあったが、後期現場実習でも前期現場実習同様の評価を受け、本人は就労移行支援事業所に進路を変更することと決めた。この本人とのふり返りを紙面で保護者に伝えることで、保護者と本人の気持ちの整理の経過、進路変更への経緯等が適切に伝わり、本人と保護者で進路について方向性を決めることができた。

・ 高等部3年生 D

前期現場実習後、仕事内容、職場環境、周囲の人との関わり等について、本人、担任、進路担当の3者で話をする時間を設けた。事業所で「挨拶・返事」「質問」「報告・連絡・相談」の項目で「できていない」と評価を受けたことは、改めて自分の適性と仕事内容とを照らし合わせて考え直す機会となった。できなかった要因をふり返る中で、職場で求められる作業スピードが速すぎることや作業音が大きいことが自分には合わないという感覚への気づきがあった。このことから、その職場では自分の能力を適切に発揮できそうにない、当初思っていた仕事内容や環境ではないという思いに至り、進路先を変更することになった。

・ 高等部3年生 E

本人の意思が尊重されることが難しい環境で育ったEは、考えることを諦めてしま

しやすい傾向にあり、保護者の意見を納得しないまま受け入れがちであった。後期現場実習も保護者の希望により本人が希望する職種とは異なる事業所で行った。しかし、結果的には実習後の本人、担任、進路担当の3者でのふり返りで、「自分の能力を発見できる職場であると感じた」と自分の思いを率直に表現した。教員が本人の選択したことを応援する立場であることを伝え、ふり返りの記録を材料に家庭で話し合う機会を設けることで、本人は「今回の実習先に就職したい」と意思を表明することができるようになった。

・高等部3年生F

前期現場実習で、事業所から「スピード」に課題があると評価を受けた。後期現場実習では「作業のスピードをあげる」ことを目標に実習に臨んだ。日常、丁寧にゆっくり作業をしてきた生徒であるため、スピードを意識し作業をするように努力はしたが、求められるスピードで仕事をするにはまだ難しかったようである。このことを中心として、時間をかけてふり返り、本人が気持ちを言語化することで、進路を見直し、進路先を変更することとなった。

5 考察

生徒たちは前期現場実習の際の事業所からの評価を担当と確認することで、自分の弱点を受け止め、後期現場実習に向けたプロフィールに反映させていた。客観的な自己理解が難しい生徒にとっては、他者からの評価は自分の弱みの核心に迫るよい材料となったと考える。ただし、弱みを受け止めることは容易にできることではない。前期現場実習の評価を視覚的に確認するだけでなく、指摘を受けた課題について、担任が本人への言葉かけや支援の中に取り入れることで、生徒が日々意識し、自己理解を深めていけるようにすることが大切だと考える。一方、事業所からの良い評価については、自分の強みとしてプロフィール作成に反映できていなかったり、自信につながっていなかったりすることが多かった。強みについては、生徒が自信をもつことができるように生徒に言葉かけしていくような教員の意識や生徒に強みとして伝わりやすいよう評価シートに改善していくことも必要であると考えられる。

3年生の実習後のふり返りでは、担任や進路担当と個別指導でじっくりふり返りを行うことで、生徒はこれまで言い出すことができなかつたこと（例えば仕事内容が自分に合わないこと、職場環境に適応することが難しいこと等）を言語化することができ、納得のいかない進路を選ぶことなく、自分で進路を変更していくことができるケースがあった。「生徒には感じていることや考えていることがあるが、言い出しにくい状況にある」という前提に立ち、その生徒の本心はどこにあるのかを探りながら、丁寧にふり返る時間を設けることが大切であると考えられる。その際、生徒が自分の思いを打ち明けることができる教員との信頼関係、教員の気づく力、生徒自身の選択する力の育ち等、必要な土台は複数あると考えられる。これらについては、教員間、保護者とともに日々再確認していくことが大切である。

1年生から現場実習を積み、具体的な進路選択を主に2年生3学期から考えていくが、はじめは多くの生徒が主体的に考えようとする様子はあまり見られない。実習を経て他者の評価や保護者や教員との繰り返しのコミュニケーション等により、自己理解が促される。

そして、自分の意思を問われる経験、選択する経験を積むにつれ、自分のこととして考えられるようになる生徒がほとんどである。

今後も自己理解につながるような実習、評価を活用したふり返り、自分で考え選択する経験を積んでいくことの繰り返しが必要であると考え。

また、実習後、自分が評価されるだけでなく、自分も実習先を進路先として選択するかどうか主体的に考えることができるよう、職場の環境や仕事内容の適性等を考えることができる評価シートの項目を再考する必要があると考え。

引用文献

清永百香・是永かな子（2016）知的障害者特別支援学校高等部の教員・保護者・生徒本人に対する進路決定に関する調査：合理的配慮の視点から．高知大学教育学部研究報告, 76, 85-98.